

研究**ポスター発表 (研究発表)
小学校理科教科書に出現する複合動詞について**

関 裕子 (筑波大学)

研究の目的 多言語背景をもつ子どもを対象とした「理科日本語語彙テスト」の開発に向け、田中他(2016)は「小学校理科日本語語彙テスト作成のための語彙表」(<http://ttbj.jp/kodomo/>に公開。以下「理科語彙表」とする。)を作成した。本研究は「理科語彙表」の見出し語1324語の中の「動詞+動詞」の複合動詞に着目し、その特徴・傾向を明らかにすることを目的とする。

研究の価値・意義 「理科語彙表」の複合動詞は16カテゴリー合計で動詞全体の約1割を占めている。小学校教員による「理科語彙表」の重要度判定(関 2017)では、すべての複合動詞が重要度高、中に分類された。しかし複合動詞は、前後の動詞どちらかでも意味が分からなければ理解できない、前後の動詞の意味を足しても全体の意味が予測しにくいことから、子どもにとって理解が難しく、問題になっている可能性がある(茂木 2013)。理科教科書の複合動詞の特徴・傾向を明らかにすることにより、理科日本語語彙テストの作成のための資料、理科の学習に必要な日本語の支援をおこなう際の資料が提供できると考える。

研究方法 「理科語彙表」の複合動詞を対象に、小学校理科用教科書『たのしい理科』(大日本図書平成22年検定)の3年~6年の計7冊をテキストベース化したものを用い、特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班(2011)『教科書コーパス語彙表 (Version 1.0)』(http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.html)、国立国語研究所『複合動詞レキシコン』(<http://vlexicon.ninjal.ac.jp>)での検索結果を参考に分析した。

結果と考察 まず理科以外の小学校の教科書での出現がない、または少ないこと、意味・用法が理科固有とも言えることが挙げられる。語構造は前項、後項ともに主語や目的語をとる動詞の組み合わせが多く、多様である。また、複合動詞の多くは、特定の分野・学年において、観察、実験、結果の整理・考察、概念の説明など、学習活動に関連する内容の文中に同じ語または同種の語との組み合わせでくり返し出現する傾向が見られた。

【引用文献】

関裕子(2017)「多言語背景をもつ年少者のための小学校理科日本語語彙テスト開発に向けた語彙の選定—小学校教員による語の重要度の判定の結果について—」『異文化間教育学会 第38回大会発表抄録』pp.202-203

田中裕祐・甲斐晶子・関裕子(2016)「多言語背景をもつ年少者のための理科日本語語彙テスト開発に向けた語彙表の作成」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31号 pp.51-68

茂木俊伸(2013)「小学校国語科教科書における「つまずきことば」の分析」『鳴門教育大学研究紀要』28巻 pp.343-355